

平成 28 年 8 月 25 日(木)

## 茨城新聞に医療支援(パラオ)の記事が掲載されました

# パラオで眼科診療

## 水戸のNPO 輸送艦内で手術も

太平洋戦争の激戦地・ペリリュー島があるパラオ共和国で、水戸市内の眼科医師らが今月6日から13日まで、現地住民ら630人を診察・手術した。防衛省と米軍が太平洋地域で行う支援事業に参加した。日本統治時代の名残で日本語を話せるお年寄りもあり、日本人への感謝の言葉を実際に聞いた参加者は「難しい手術も多かったが、戦死者の霊に守られている感覚もあった。自衛隊との活動で高度な医療ができた」と満足した表情を浮かべている。

パラオ共和国で眼科診療を行ったのは、水戸市の小沢眼科内科病院のNPOで、小沢忠彦院長ら医師、看護師、視機能訓練士合わせて7人が現地へ行った。4日に成田空港発の航空機で出発。旧首都のあるコ

ロール島に拠点を置いて活動し、最終日の13日はペリリュー島でも診察。日本には15日に帰国した。診察で活躍したのは、視力・眼圧検査といった基本的な眼科検査機器を装備した車両「ビジョンバン」で、連日、50〜90人を受け入れた。海上自衛隊の輸送艦内では、40人に白内障などの手術を行った。このほか、日本国内で募集した眼鏡約2千個も寄贈した。

艦艇内での手術に当たった小沢院長は「片目が既に失明している人の、残った方の目の手術など、難症例が多かった。手術環境が整っている艦艇内だから対応できた」と振り返る。手術の1番手だったお年寄りが「戦時中には日本軍の命令で疎開して命が助かり、今また、日本人のおかげで視力が戻った」と話すなど、日本との関わりを感じさせる患者も多かったという。

ペリリュー島は、水戸市内に拠点を置いた旧陸軍歩兵第2連隊を中心とした約1万人の守備隊が壊滅した地域。小沢眼科内科病院のNPOは南太平洋のキリバスで8年前から医療支援活動を行っているのが認められ、今回の支援活動に参加した。(武藤秀明)



自衛隊の輸送艦内で白内障などの手術を実施

### 防衛省・米軍の支援事業



手術後に患者とスタッフで記念撮影。パラオ共和国